



タネガシマムエフラン

屋久島にて採集せられ、台北帝國大學紀要第十一卷にて發表さる。筆者も亦 1919年9月25日に屋久島小瀬田にて採集し、これを京都帝大植物標品庫に保存せり。本年9月14日鹿屋農學校教諭堀金義氏に依り大隅肝屬郡上高隈村假谷の山地にて採集せらる。これ九州本土に於ける第一の發見なり。ムエフランに比して唇瓣の形態は異なれども一見花の數の多きを以つて識別せらる。

尙ほ同氏は久しく不明なりし高隈山に於けるカネコソダの産地を探索せられたり。

抄 録

遠藤誠道氏：——氣候狀況指示者としての日本更新世植物群 (S. YENDO : —— A pleistocene Flora of Japan as an Indicator of Climatic Condition, in Jour. Geol. Soc. Jap. XLII. 1935. p. p. 658—674.)

著者は塩原木葉石層なる塩原層のフロラを研究し、本フロラは更新世のものであつて、當時海面上 5,600 m. の處にありし淡水湖の沈積物に埋藏されたものであり、フロラの性質は現今本州中部 1500 m. 或は蝦夷島の中南部にあるものに彷彿たるものであるとなし、當時塩原海面上 5,600 m. にありしフロラは今日同處海面上 1500 m. のフロラに相當するものであるから、更新世の當時は其地方氣温は今より攝氏 5 度乃至 5.6 度低かりしものであると結論せり。

塩原地方は第三新紀の鮮新世には淺海にして塩原第三紀層なるものを、若き古生代地塊の上に沈積しつゝありしが、其終りには甚しく淺海と變じ、最後に此沈積層を變動せしめ凸凹の地形を成し、此地形が殆ど平坦面化せし頃は第三紀の終りであ

Dec. 1935.

235

つた、其より更新世に入るや此地方に陥落起りて塩原、高原の兩火山行動起り、ために凹地に湖水を成すに到り、此湖水中に沈積つゞくや附近の樹木の木葉は甚だ多量に土砂と共に沈積埋藏せらるゝに到れり、而も當時此湖水は海面上 5,600 m. の處にあつたと決定すべき種々の事實がある、即ち現今の塩原と大差はなかつたのである。

著者は塩原化石フロラを研究して三五科五八屬百十五種を決定せり、此フロラの性質を見るに、絶滅種が甚だ少くして今日此地方に生ずるものゝ多き事、及び第三紀に北半球に廣く分布をなし現今は世界の一局部に残つてると云ふ要素がないから、是は更新世のものであつて第三紀のものでないと定め、又總ての要素は今日本州の山地や北海道に産するものであるから此フロラは今日温帶上部のものに相當すと結論せり。

抄録者は遠藤氏の擧げられたる要素を通覽して此フロラを考察すれば、本フロラは湖岸山足のものゝと高原火山山腹以上のものゝとから成る事が第一に注意せられ、更新世の其當時塩原海面上 5,600 m. のフロラは、少くとも今日の塩原フロラと大差なく、或は少しく暖かなりしとも云ひたく、更新世其當時塩原 5,600 m. の氣温は、決して、今日塩原 5,600 m. の氣温と大差なく或は却つて少々暖かつたと云ひたい位である。

先づ第一に遠藤氏の塩原フロラは湖岸に生ぜし又は湖岸山足に生ぜし植物と、近くにありし高山々腹の植物とに分つべきもので、高原火山山腹以上の代表者は即ち *Alnus Maximowiczii*, *Betula Ermanii*, *Thuja Japonica*, *Fagus crenata*, *Prunus Maximowiczii*, *Acer Tschonoskii*, *Rhododendron Deglonianum*, *Viburnum urceolatum*, (*Tsuga diversifolia*) 等であるが、是等は次の湖岸山足の要素を除いた他のものと共に森林を成してゐたと見解する。

フロラ全体としては温帶のものなるは云ふまでもないが、然し皆温常上部のものとは考へ難い、少くとも湖岸附近は温帶の最下部であつて、高い山の山腹以上は温帶上部であつたものと見るのが至當と考へる、即ち湖岸の山足には *Davallia bullata*, *Alnus Sieboldiana*, *Betula ulmifolia*, *Hydrangea hirta*, *Amelanchier asiatica*, *Sorbus gracilis*, *Acer carpiniifolium*, *Acer eupalmatum*, *Meliosma myriantha*, *Xolisma elliptica* 等が多く混生してゐたものと思はざるを得ない。

それで當時の塩原湖岸より其の山腹の状を、今日の或個處に比較して見ると、丁度、今日越中の平野から離れて黒部溪谷中に入りし黒雜の部分か、陸前海岸の暖い處から離れて仙臺地方に入りし部分と何等大差のないものであつた、と考察し、塩原更新世フロラは即ち間氷期の如き時代のものであると考へる。

抄録者想ふに日本では更新世の寒冷なりし時代の化石フロラなどは恐くはでまいと思ふ、寒冷なりし時代は植物の繁茂が悪くて、寒地植物のみであるから、化石となる材料が少ないので、間氷期のやうに繁茂した森林のありし時のみ木葉石とも澤山なるのである、寒冷なりし時代の植物は獨り現時の生化石なる高山植物の要素及其の現世分布の狀が之を代表するのである。(G. KOIDZUMI)

ブーランガー氏：亞細亞のイバラ屬，第二，(G. A. BOULENGER: — Revision des *Roses* d'Asie. Bull. Jour. Bot. Bruxelles, XIII. 1935. p. p. 165—266.)

Sect. Eglanteriae の *Pimpinelli-Suavifoliae*, *Orientalis*, *Alpinae-Vestitae* 等の各群の研究であつて、*Rosa morrisonesis* HAYATA は *Rosa Webbiana* WALL. に非常に近いものだと考へてゐる、萼片が少し大きいことや葉の鋸齒が少し鋭い位で別けられたものだから餘り異つたものではあるまい。(G. KOIDZUMI)

ツェクツォト氏：トルコブナの分布，第三紀北半球に分布せるフェロンハンノキはハンノキ近似品也，(H. CZECZOTT: — Distribution of *Fagus orientalis*, 1932; — What is *Fagus Feroniae*. in Acta Soc. Bot. Polon. XI. 1934. Suppl. p. p. 109—116.)

トルコブナ (*Fagus orientalis* LIPSKY.) は現世では黒海の西岸 Dobrudscha (Dobruja) に於て Donau 河岸に達し、Bulgaria, Macedonia, Greece, Asia minor, Northern Syria, Persia, Caucasus, Transcaucasia, Crimea 等に分布してゐるが、第三紀には Spain, France, Italy, Czechoslovakia, Greece, Caucasus に分布せしを以て地域はひろかつた。

歐洲、南滿、Alaska, Nevada 等に第三紀時代分布してゐた、*Fagus Feroniae* UNGER と稱するものは、實はブナにあらずしてフェロンハンノキである、**Alnus Feroniae** (UNGER) CZECZOTT は、現今東亞に産するハンノキ *Alnus japonica* (THUNB.) S. et Z. に最も近似せる種である。(G. KOIDZUMI)

ホルツタム氏：馬來半島の木生羊齒 (HOLTUM, R. E.: — The Tree-ferns of the Malay Peninsula, in Bull. Singapore Bot. Gard. VIII. 1935. p. p. 293—320, t. t. 29—36.)

氏は馬來半島の木生羊齒を研究して次の十六種が分布する事を明にせしが、木生羊齒の分類に於ては、葉柄基部の鱗毛の性質、葉柄上の棘其他の隆出突起物、色彩、鱗毛の性質等が重要な性狀を示すと云ふ、又氏は *Alsophila*, *Hemitelia* を *Cyathea* に合せり。*Cyathea latebrosa* COPPEL. は Indo-Malayan に最も廣大なる分布をなし、